

志村 敦弘

(東洋大学博士後期課程満期退学)

「王守仁思想における「簡易」説の意義」

中国・明の大思想家王守仁（王陽明）は、「致良知」を自らの思想の「大頭脳（大いなる要）」（『伝習録』巻中「答歐陽崇一（一）」）とした。彼は「致良知」、すなわち良知を發揮して正しく生きることこそが人において最重要であるとしたのである。

彼がこうしたことについて語る時、しばしば「簡易」という語を口にす。これは『易』繫辭上傳を典拠とし、王守仁においては「単刀直入」「シンプル」「平易」という意味で使われている。つまり「簡易」とは、人として最も重要なこと、すなわち致良知=正しい生き方にのみ注意し、それ以外の要素を副次的なものとしてみることである。つまり、「単刀直入」に致良知に取り組むべきであり、また誰もが有する良知を發揮し（致し）さえすればよいのであるから、何らの知識も才能も必要ない、簡要であって繁雑ではない、つまりは「平易」でもある、ということになる。

この「簡易」についての説は、彼の壮大な理想的国家社会論である、いわゆる「抜本塞源」論（『伝習録』巻中「答顧東橋書（十二）」に載せる）の根底を成すものでもあった。そこでは、万人の良知の「同然」と致良知にのみ基づく社会像が描かれ、その「至簡至易」な在り方が強調されている。

このような彼の「簡易」説は、致良知のための不可欠の前提であって、經書論や行政官としての政策（「十家牌法」など）に至るまで、その思想・実践の全体に係る極めて重要なものであると言っても過言ではない。しかしこのことは先行研究では必ずしも十分に上げられてこなかった。ではそれはどのようなものであったのか。本発表では王守仁の「簡易」説と、その拡がりについて論じることとする。